

発行：〒656-0011 兵庫県洲本市炬口1-3-19 東亜天文学会速報部

郵便振替口座：00980-8-189107 加入者名：東亜天文学会速報部 購読料1部130円

Published by the Department of Yamamoto Circular, Oriental Astronomical Association

Collaborating with the Computing and Minor Planet Sections

P. O. Box No.32, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-8691 JAPAN

e-Mail address: (Subscription) URL: <http://www.oaa.gr.jp/~oaacs/yc.htm>

編集：中野 主一 ☎ 0799-22-3747 Fax: 23-1104 e-Mail address:

Editor: *Syuichi Nakano*, 3-19, Takenokuchi 1 Chome, Sumoto, Hyogo-Ken, 656-0011 JAPAN

お詫び Editorial Notice

天界 2009年3月号にあるとおり、本会 OAA 内で反乱があったために、山本速報の発行が大幅に遅れたことを、まず、お詫びしたい。特に、この速報の有料購読者の方々には、速報がこんなに遅れ、お詫びのしようがない。

この反乱の結果、私は、OAA のすべての事務、はたまた、天界の編集までしなくてはならなかった。ご存知のとおり、私は、天文雑誌の原稿、発見業務、代表取締役、MPC、CSBN、美星、YC、その他、一連の関連業務等々の多くの仕事がある。さらに、天文年鑑や HICQ や MPC 用の周期彗星の予報など、その終了に約1ヶ月を要する年間単位のいくつかの仕事もある。その上、2008年3月からは、誠に余分な「OAA 関係の会計+振込等の仕事」をこなしてきた。さらに今年2月より、これに「天界の編集」、さらに4月からは、これに「当会のすべての事務業務」が加わった。

前理事長であった病弱な菊岡氏は「重荷は分かっているが、誰も助けられない」という OAA の体質に殺されたことは、疑りようのない事実である。実際のところ、2007年度の帳簿は、その年の9月までしか、記載がなかった。それも、いっぱい抜けがあった。氏の健康は、すでに、その頃から、ボロボロになっていたのだろう。私にも、毎月「毎日が OAA づけです」というメールが届いていた。そんな病弱な人に、OAA の理事長職を押しつけた方は、氏と氏のご家族に申し訳なかったと思わないのだろうか。しかし、言っては、申し訳ないが、氏は、その他に仕事が多かった。しかし、私は、今の本業以外に、菊岡氏の仕事量+天界の編集という私にとって誠に余分な仕事を背負わされたことになる。もしも、私まで OAA に殺されると、OAA には、終世「重荷は、分かっているが、誰も助けられない」という悪評と「OAA は、社会に残る最後の悪の大権化……」という亡霊が付きまといていくことになるだろう。

なお、私は、OAA の会員ほど、この会に愛着を持っていない。そんな『大馬鹿もの』に理事長を任せ、機関誌「天界」の編集を託すようでは、OAA の未来があるといえるのだろうか。また、こんな OAA の身勝手、気まます許しておいて良いのだろうか。会を運営する無気力・無頓着な理事・評議員に猛省を求めたい。

超新星 SN 2008ij in NGC 6643

山形市の板垣公一氏 (*Koichi Itagaki, Yamagata*) は、2008年12月19日夕刻、20時 JST 頃に 60-cm f/5.7 反射望遠鏡+CCD 使用して、北天りゅう座にある系外銀河 NGC 6643 を撮影した検索フレーム上に、15.9 等の超新星 2008ij を発見した。この超新星は、同氏が12月16日に検索した時には、まだ出現していなかった。また、氏が保有する多数の過去の検索画像上にも、その姿は見られなかった。板垣氏は、同銀河が東の空に回った12月20日04時、さらに、その夕方の20日17時にその出現を確認した。超新星の光度は、そのとき、それぞれ、15.8等と15.7等であった。板垣氏は、この超新星の姿は、DSS (Digitized Sky Survey; 極限等級約20.5等級) 上にも、見られないことを報告している。発見の夜、20日02時頃、上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) は、この超新星の出現を確認した。氏の光度は16.0等であった。超新星の出現位置は、赤経 $\alpha = 18^{\text{h}}19^{\text{m}}51^{\text{s}}.81$ 、赤緯 $\delta = +74^{\circ}33'54''.9$ 、超新星は、銀河核から東に23"、南に11"の位置に出現している (東亜天文学会計算課新天体発見情報No.135, CBET 1626, CBET 1627, CBET 1628)。

超新星 SN 2008in in M61

山形市の板垣公一氏 (*Koichi Itagaki, Yamagata*) は、2008年12月27日早朝、04時 JST 頃に栃木県高根沢町にある氏の観測所で 30-cm f/8.0 反射望遠鏡+CCD 使用して、おとめ座の銀河群にある系外銀河 M61 (= NGC 4303) を撮影した検索フレーム上に、14.9 等の超新星 2008in を発見した。この超新星は、同氏が2008年12月20日 JST に同銀河を撮影した画像上には、まだ出現は見られず、氏が保有する多数の過去の検索画像上にも、その姿は見られなかった。板垣氏は、翌日12月28日夜にその出現を確認した。同じ夜、28日01時頃、上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) も、この超新星の出現を確認した。氏の光度は15.1等であった。超新星の出現位置は、赤経 $\alpha = 12^{\text{h}}22^{\text{m}}01^{\text{s}}.77$ 、赤緯 $\delta = +04^{\circ}28'47''.5$ 、超新星は、銀河核から東に102"、北に22"の位置に出現している。この超新星は、すばやく世界各地でスペクトル観測が行われ、極大近くか、極大をすぎた II 型の超新星であった。なお、板垣氏は、2006年にこの銀河に出現した別の超新星 2006ov を発見している。氏の超新星発見は、これで44個目 (東亜天文学会計算課新天体発見情報No.136, CBET 1636, CBET 1638)。

超新星 SN 2008ip in NGC 4846

群馬県大泉町の小林隆男氏 (*Takao Kobayashi, Oizumi*) は、2009年1月1日早朝、03時 JST 頃に 41-cm f/4.3 反射望遠鏡+CCD を使用して、りょうけん座にある系外銀河 NGC 4846 を撮影した検索フレーム上に、15.7等の超新星 2008ip を発見した。この超新星の姿は、同氏が2003年2月27日、2004年1月1日、2006年1月2日に同銀河を撮影した検索画像上には、見られなかった。小林氏は、翌日1月2日深夜、00時すぎにその出現を確認した。そのとき、超新星の光度は15.5等であった。同じ1月2日夜、02時40分には、上尾の門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) も、この超新星の出現を確認した。氏の光度は15.6等。続いて、この超新星は、栃木県高根沢町の観測所に出張中の板垣公一氏 (*K. Itagaki, Takanezawa*) によっても、02時47分に光度15.7等で捕えられた。超新星の出現位置は、赤経 $\alpha = 12^{\text{h}}57^{\text{m}}50^{\text{s}}.20$ 、赤緯 $\delta = +36^{\circ}22'33''.5$ 、超新星は、銀河核から東に30"、北に18"の位置に出現している。この超新星は、発見時刻的には、昨年発見された最後の超新星となるだろう。ただし、それ以前の過去の発見が報告され、超新星符号は、さらに増えることがある。なお、小林氏は、1997年に新周期彗星 C/1997 B1 (Kobayashi) を発見している (新天体発見情報No.22)。その他にも、我が国で最高数となる多数の新小惑星を発見し、その中で約2500個が番号登録され、氏に命名権がある。また、5個の地球接近小惑星も発見している。しかし、氏の超新星発見は、これが初めてのこと (東亜天文学会速報部新天体発見情報No.137, CBET 1641, CBET 1649)。

しぶんぎ座流星群 Quadrantids in 2009

神戸の豆田勝彦氏 (*Katsuhiko Mameta, Kobe*) は、昨年に引き続き、室戸市で2009年1月3/4日にこの流星群の観測を行なった。当夜は、2008年の観測時に比べ、ややもやがあり、多少、条件が悪かったものの同群は、かなり活発な出現を示したという。当夜のこの群の出現は、23時30分から26時頃は、輻射点はまだ低空にあるにも関わらず、活発で ZHR140 個~150 個の出現があった。その後は、出現数が次第に減少ぎみであったが、28時50分頃より、また活発になり、29時30分までの40分間に89個という大きな出現となった。氏は、この前後の ZHR を28時00分~28時30分に93個、28時30分~29時00分に124個、29時00分~29時30分に196個、29時30分~29時50分に78個と報告している。氏によると、短時間に活発に活動するピークが見られ、この活動は、2001年の出現と同程度の規模であったという。

豆田氏の観測は、1月3/4日23:30~24:00 JST、全流星19個、しぶんぎ群4個、最微光星6.4等、以下同順に24:00~25:00、43個、13個、6.4等、25:00~26:00、64個、25個、6.4等、26:00~26:50、67個、35個、6.4等、ZHR142個、27:00~28:00、79個、46個、6.2等、126個、28:00~29:00、109個、65個、6.6等、110個、29:00~29:50、131個、90個、6.6等、140個。なお、天文ガイド2009年3月号によると、豆田氏の観測同様に、同じ頃、この群の ZHR は160個近くに達したという (cf. YC 2578)。

ボアティーニ新周期彗星 P/2008 Y1 (Boattini)

ボアティーニ (*A. Boattini*) は、2008年12月22日にカテリナ・スカイサーベイの68-cm シュミットを使用してみずがめ座を撮影した検索フレームの次の位置に17等級の新彗星を発見した。発見当時、彗星には、集光した10"のコマと東北東に20"の尾が見られた。12月24日にイタリーのブジ (*L. Buzzi*) による60-cm 反射での観測では、彗星には、10"ほどのコマと集光部から東北に20"ほど伸びた尾が観測された。また、同氏による25日の観測では、東北東に伸びた15"の尾が見られるなど、この彗星は、多くの観測者によって追跡され、12月22日と23日には東に伸びた尾が観測された (IAUC 9007)。なお、守山の井狩康一氏 (*Y. Ikari, Moriyama*) からも、その確認段階で追跡観測の報告があった。

2008 UT	α	(2000)	δ	Mag.
Dec. 22.08726	22 ^h 13 ^m 51 ^s .56	-02° 54' 17".3		17.9

OAA 速報部では、2008年12月22日から2009年4月13日までに行なわれた160個の観測から次の軌道を決定した。門田健一氏 (*K. Kadota, Ageo*) による CCD 全光度は、12月28日に18.0等、29日に17.9等、1月3日に17.8等、11日に17.9等、2月21日に16.4等、3月15日に16.8等と観測された。位置観測は、芸西 (関勉) からも報告された。なお、彗星は、周期が約10年の新周期彗星であった。

T = 2009 Feb. 25.0973 TT	Epoch = 2009 Feb. 18.0 TT
$\omega = 162^{\circ}.3652$	e = 0.734881
$\Omega = 259.7099$	a = 4.797761 AU
i = 8.8051	n° = 0.09378777
q = 1.271977 AU	P = 10.51 年